

|              |   |
|--------------|---|
| Title        | 「他人の近さと遠さ」  |
| Author(s)    | 三浦, 隆宏  |
| Citation     | 臨床哲学のメチエ. 9 P.35-P.36   |
| Issue Date   | 2001  |
| Text Version | publisher   |
| URL          | <a href="http://hdl.handle.net/11094/6766">http://hdl.handle.net/11094/6766</a> |
| DOI          |   |
| rights       |   |
| Note         |   |

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

# 臨床哲学 Cafe&Bar

## 進行役の感想

テーマ：「他人の近さと遠さ」

進行役：三浦隆宏、サブ進行役：会沢久仁子

まず、当日の会場の雰囲気と議論の内容について簡単に述べておこう。私が進行を担当した研修室Bは30名以上の参加者がいて、その人数の多さには正直、困惑せざるをえなかったが、ありがたいことに男/女の数はほぼ半々、年代も下は10代の方から、上は60代の方まで満遍なく参加されていたので、とりあえずは理想的な（街角で開かれる）哲学カフェの雰囲気をかもし出していたというてよいと思う。

だが、進行は失敗した。「三木清の言葉に『賢い人はますます賢くなるが、愚かな人はますます愚かになる』という言葉があります...」と、テーマと合致しにくい意見を述べる方や、「結局のところ中庸が大事なのであって...」と、経験を述べるだけでなく、ついつい自分の信念までをも述べてしまう方もいれば、私がこれまでに身を置いたことがない（障害者という）立場から、たいへん重みのある発言（「私としては、他人にはもっと踏み込んで関わってもらいたい」）をされる方もいて、私はこれらの方々の言葉を聴き取るのに精一杯で、その結果、進行役としての役割を果たすことができなかった。つまり、参加者から出された経験をもとに「問い」を定め、その問いに

対する「答え」を探るという形で議論を進めることができなかつたのである。なお、ここで注意しておかなければならないのは、「参加者がさまざまな意見を、さまざまな立場から述べる」ということは、ふつうに街角で開かれる哲学カフェにおいては至極当然のことなのであって、今回の失敗の原因は、明らかに進行役としての私の（発言者に対する）関わり方にあったということである。（この点に関しては後で述べる。）

結局、私は参加者を前にして、終始「おろおろ」しっぱなしの状態、発言される方と発言されない方の差もはっきりしてしまい、この状況を参加者がどのように思っていたのかはアンケートの結果にもはっきりと現れていた。つまり、発言をされた方は議論の掘り下げがなされなかったことを残念がり、発言をされなかった方は、発言者が特定の（年配の）方に偏っていたことに強い不満を感じておられた。若い人々が年配の人々に向かって、気楽に自分の意見を言えるような雰囲気にならなかったのはひとえに進行役の責任であり、せつかくさまざまな人々が集まっていたという「利点」を活かすことができなかったことをたいへん残念に思う。参加者の皆さん、ごめんなさい。

ところで、私は今回はじめて、哲学カフェの進行をおこなったわけだが、進行を実際に体験してみて(そしてその進行が見事に失敗して)、身をもって学んだことがいくつもある。失敗は今後の取り組みに活かすことで、かろうじてプラスの意味をも持ちえてくると思うので、今回の失敗の原因について以下、記しておきたい。

失敗の最大の原因は、発言された方の意見を「この方はこのようにおっしゃいましたが、皆さんはどう思われますか」と他の参加者に「ふる」のではなく、私自身が発言者の意見に「応答しよう」としたり、それまでに「出された意見との間に脈絡をつけよう」としたことにあったと思う。そのために、途中から私の頭が混乱し、收拾がつかなくなってしまった。(じっさい、私はあの場で二度ほど考え込んでしまっている。)

「聴く」ことには、相手の言葉を「受け止める」という側面と「受け流す」という側面の、二つの側面があるわけだが、今回私は、本来ならば後者で聴くべきところを前者で聴いてしまったがために、複数の、そして予想もつかない発言者の言葉の渦にまさに「呑み込まれてしまった」わけである。

進行役は、あくまでも議論の交通整理役であり、議論そのものに介入してはならない。ただし、その整理も本来は、参加者同士が議論の流れのなかで自然とおこなってゆくものであって、進行役

はそれを一歩引いた地点から「見守る」というのが理想なのだろう。そのためには進行役はある程度、「冷めて」いなければならない。

「冷めて」進行するためには、テーマも進行役にとって、あまり思い入れの強いものであってはならないだろう。(その点、今回のテーマは自分自身で決めたこともあって、私にとって少々思い入れが強すぎたように思う。) テーマが進行役にとって思い入れのある、馴染みのあるものであれば、たしかに発言者の意見を理解することはそれだけ容易にもなるが、もしその意見が自分がこれまで考えたこともないようなものであれば、容易に「たじろいでしまう」ことにもつながりやすい。

発言者の言葉との「距離」の取り方、議論の流れとの「距離」の取り方、そしてテーマとの「距離」の取り方。今回の経験は私にとって、図らずもこれらの「近さ/遠さ」のさじ加減を体験的に学ぶよい機会であった。この点に気をつけて再度、進行役に挑戦してみたい。

(みうらたかひろ)